



森知英さん、米谷毅彦さんの同窓生アーティストコンビによるミニ・コンサート(写真上)と、45年卒菊地さんによる「俵屋玄蕃」の熱演ステージ。

雨あがりの5月11日土曜日、東京のアルカディア市ヶ谷で第33回在京白聖会総会が開催されました。

例年は、母校

の創立記念日である5月13日開催を原則に土・

第33回在京
白聖会総会

『白聖文化』の香りを満喫！ 第33回総会に241名集う

在京白聖会報

第13号

平成14年10月14日

発行

在京白聖会

〒101-0025 東京都千代田区

神田佐久間町1-11

産報佐久間ビル

産報出版(株)内

TEL&FAX (03) 3254-9301

日曜日を避けていましたが、こ
としの幹事団である昭和45年卒
業生のたつての希望により、あ
えて11日の土曜日に開催しまし
た。これは、近県や遠来のOB
もたくさん参加できるよう、在
京白聖幹事会にお願いしての実
施です。

土曜日開催のメリットを生か
し、『白聖文化祭』と銘打って
4時から講演会、5時半から演
奏会と総会・懇親会と盛り沢山
のプログラムを楽しんでいただ
きました。

講演会は「野村胡堂をめぐる
白聖友情史」と題して、盛岡中
学・昭和20年卒の太田愛人(あ
いと)さんが、盛中の文人たち
の心温まる交流を洒脱なエビソ
ードを交えて熱弁されました
(一・二面に講演録)。出席者は
太田さんの『白聖史の生き証人』
ぶりに驚嘆するとともに、「盛

中が優れた人材を数多く輩出し
ていたのは知っていたが、お互
いがこんなに強い絆で結ばれて
いたとは！」と、あらためて白
聖校の土壌の豊かさともぐもり
を感じたようです。

引き続き、会場を大ホールに
移して演奏会が行われました。
ステージには、日本音
楽界の明日
を担う若手
の音楽家が
出演。近年
の白聖アー
ティスト群
像を代表し
て、盛岡一
高昭和55年



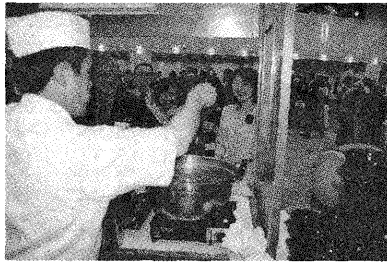
校歌斉唱、エール交換で今年も感動の幕となった

卒のオペラ歌手・米谷(まい
や)毅彦さんと、同じく63年
卒のピアニスト・森知英(ち
え)さんです。米谷さんのオ
ペラさんからの「カルメン・
闘牛士の歌」の熱唱と、森さ
んの華麗なショパンの調べが
会場に流れ観客を魅了しまし
た。「後輩たちの活躍ぶりを目
のあたりにして大感激！」と、
盛中の大先輩が感動していた
のが印象的でした。

総会の議事で会務報告が了
承されたあと、懇親会では南
部小麦粉を生かしての盛岡の
郷土料理「ひつつみ」がふる
まわれ、屋台には行列がなら
ぶ人気。なつかしいふるさと
の素朴な味覚に舌鼓を打ちま
した。

岩手の地酒ではほろ酔い気分
の宴たけなわ、仙台から駆け
つけた45年卒の菊地伯(つか
さ)さんによる「俵屋玄蕃」
のステージや、森さんの伴奏
で米谷さんによるナポリ
民謡「帰れソレントへ」
で会場のムードは最高潮
に達しました。

最後は校歌斉唱、第一
そして第八応援歌を高歌
放吟、幹事団から参加者
へ感謝のエールを送りお
開きとなりました。
(昭和45年卒・在京白聖会
総会幹事団事務局)



「野村胡堂をめぐる白聖友情史」 (太田愛人)

在京白聖祭講演会より

第33回在京白聖会総会で講演した太田愛人さん(盛中・昭和20年卒業)の講演録です。素晴らしい講演に、一同大感激でした。

「友情史」

石川啄木の「ローマ字日記」(岩波文庫)。その後記に、桑原武夫氏が解説を書いていいます。その中で、日本友情史というくだりがありまして、金田一京助と啄木の友情は、まれにみる優れたものである、と非常に誉めておりました。ああ、友情史というものもあるんだなあ、と気がついたわけで、あえて今日は「友情史」という題にしました。

レコード評論家「あらえびす」

さて、野村胡堂という人は、三つの名前を持っていました。実名が長一(おさかず)、それから胡堂、もうひとつが「あらえびす」です。三人分の仕事をやっていた人間であります。まさに奇想天外な生涯をおくりました。司馬遼太郎は、毎月「オール読物」が出るとまっさきに野村胡堂の銭形平次を読んだ、とい

う話があります。さらに彼は、あらえびすのレコード評論を熱心に読んでいて、胡堂とは別人と思っていた。ところが、ある時これが同一人物だと聞いてびっくり仰天。なんで銭形平次とバツハが一緒になんだ、と。皆さんは受付で「あらえびす記念館」のチラシをもらったと思いますけど、夏休みに岩手に帰ったら訪ねてみて下さい。とにかく、おもしろい建物です。中にレコードが8千枚あります。もともとは2万枚あったのですが。それから、蓄音機、北斎の絵、そして武鑑などもあります。

黄金時代の盛中で小説を

胡堂は、盛岡中学の時、1年ドツペつているんですね。成績が悪くてじゃなくて、病気で留年しました。入学した時は盛中の黄金時代で、金田一京助、郷古潔(こうきよし)、及川古志郎(こしろう)といった人々と一緒なんです。

さらに胡堂は卒業してから2年浪人しました。なぜかという。親父との確執がありまして。親父は「彦部村は無医村だから医者が必要。だから医者になれ」って言うんですが、胡堂は文学に取り憑かれていて「絶対いやだ」って。彼は盛中3年の時、泉鏡花なんか惹かれて三百枚ぐらいの小説を書いてい

「新渡戸先生の後をついて行く!」

胡堂が一高に入って2年目に、校長として来たのが新渡戸稲造。胡堂は新渡戸を大変尊敬していました。終生みんなから、「銭形平次とバツハ、ベートーベンはどうつながるの?」と聞かれ、「新渡戸先生は国際精神あふれるキリスト教徒であるけれども、一方で、武士道、これを英文で書いています。おれは、先生にみてもらいたい」と昂然と答えたそうです。

しかし、胡堂は東大法学部に入りましたが、卒業しないんです。なぜかという。親父が村長していたのですが、破産してしまつた。村は米作りだけではだめだ、ということ。馬、羊、家畜を飼つたのですが、これが流行病に罹つて死んでしまいました。全部お父さんが借金責任を負つて、それでかまどがひっくり返つたんです。家からの仕送りがなくなつて胡堂は大学に行けない。法律は嫌いだったこともあり、中途退学するんですが、その前の年に結婚しました。

かけそば一杯の結婚式

お相手は橋本ハナさんという彦部村の出身の人。ハナさんができたばかりの盛岡女学校に入つて、胡堂と恋に陥つた。それが女学生の間で噂になった。

『白梅』の方もこれはご法度で

しょ。ハナさんは非常に苦境に立たされた。まあ、盛中も戦前はすごかったですね。白梅校に運動会を見に行った生徒が、上級生に寄つてたかつて殴られたつていう時代でしたよ。

そこで、啄木も大変世話になつた新渡戸仙岳(せんがく)という先生が、ハナさんに「ここでも中途退学するのは惜しい。日本女子大に移れ」とすすめてくれました。その付属高校から日本女子大へと進んだわけです。そして、女子大生のハナさんが「在京石手人会」に行つて胡堂とバツタリ再会!

こうして胡堂とハナさんは結婚しちゃつた。でも実家は猛反対です。ハナさんの家は昔の士族、胡堂の方は村長をやつたけど、農民の出なんです。それでもお父さんがやつと上京して、ハナさんを見てすっかり惚れ込み、「宜しく願います」と頭を下げて帰つて行つた。結婚式はそば屋の二階で行われました。出席したのは長沼智恵子、ご存知ですか?後の高村智恵子と金田一京助だけ。かけそば一杯食つて、それでお開き...

銭形平次を383編連載

結婚した胡堂は、まず職を捜さなければならなかつた。明治45年まで大学で、講義を筆記して、それを学生に売って飢えをしのいでいました。

その頃、胡堂が数寄屋橋をひ



「3時間ほしかったネ」と熱弁の太田愛人さん

よるひよろ歩いていたら、報知新聞社の2階から「おーい、野村じゃないか。どうしたんだ？」と呼びかけた男がいた。安村省三という盛中の同級生で、日ロ戦争で通訳やった報知の記者でした。「戦捜しだ」と答えると、「何をしたいんだ？」「新聞記者じゃないんだけど、みんな反対している」「じゃあ、おれのとこへ来い」というわけで、編集長に紹介されました。この編集長がうまい具合に岩手の出身で、

「よし、明日からお前は政治部の政友会と陸軍の担当だつ」...

その後33年間、胡堂は新聞記者をやるわけですが、この間に原稿6万枚を銭形平次のために書いたついでなんです。銭形平次は全部で383編、これは、ひとりの人物を描いた小説としては世界一です。レコードを2万枚、これも日本一のコレクシヨン。しかし、胡堂の自慢は何か、といいますと、「33年間、新聞社に『腰弁』で通ったことだ」と彼は書いています。腰弁、わかりますか？金田一京助の「明解国語辞典」には、腰に弁当を下げて通勤するような安月給取りの意味、とあります。新聞社でも店屋物を取らないで弁当を食べた胡堂。そして終生、洋服は着ないでハナさんの縫った和服で通した胡堂でした。

『ユーモレスク』で新譜紹介

大正6年に胡堂は社会部長になりましたが、この頃、レコードに取り憑かれちゃった。もちろんSPレコードですよ。レコードの歴史はちょうど一世紀になります。胡堂は明治から大正にかけてたくさんレコードを集めました。中でも一番聴きたいのは、やはりベートーベン



150席のイスも足りず、若手は立ち席で聴講！

の第9シンフォニー。ところが、第9はなかなかレコードに出ませんでした。

たんです。皆さんの中にもその奨学金を受けた人がおられたようですが、奨学生が全部で千人いるんですよ。

胡堂の事務所に、今でも大理石の大きなブロンズがあります。これは、彫刻家の舟越保武が一番貧乏していた時に胡堂が買ったものです。

また、舟越と盛中の同級生で画家の松本俊介の「こどもの像」も買いました。友情っていうのは、同級生だけではなく、貧乏をしている後輩の芸術家のために、持っているお金は出して、作品を買って持ってくる、こういうことなのですね。

金田一の『ユーカラ』に涙

胡堂の晩年に、九州一の名医といわれた同級生の小野寺直助が、毎月学士院会へ出席する時、一日早く上京して胡堂を診察していました。学士院会ではいつも隣に金田一京助が座っていて、胡堂の病状を聞く。

小野寺が38年10月に来て「野村があぶない」と告げると、翌日金田一が『ユーカラ』第3巻の翻訳を抱えて、「出来た、出来た」と言って野村家を訪れる。すると、「二人は手を合わせて...。語るも涙です。その翌々日、胡堂は亡くなりました。葬儀委員長は金田一京助が務めました。こうして、胡堂の友情史が幕を閉じるわけがあります。

原敬、胡堂をかわいがる

大正13年に東京音楽学校で第9シンフォニーの日本最初の公演が行われ、ちょうどその頃、ベルリンとロンドンから第9シンフォニーが同時に売り出されました。どっちが先に船便で着くかわからない。日本で最初に第9を聴きたい、という思いで、胡堂は結局2つ買っちゃった。

レコードを聴いて胡堂は、感動のあまり、第1から第9まで、報知新聞に連載したんです。おかげで、日本の交響楽運動が盛り上がった。さらに、学芸部長になった胡堂は学芸欄に「ユーモレスク」という外国の新しいレコードを紹介するコラムを書いた。さあ、それが受けて、報知をとる読者がたくさんいたんです。

会の記事は、取材をいじわるされるわけです。当時、政友会の原敬が上り調子なのに記事が取れない。ところが、原敬は胡堂にだけ取材に応じ、夜中でもいいって言うんです。おかげで非常に良い記事を書けました。

「宝は天に積める」

かつて胡堂は私をつかまえて、「僕はね、銭形平次をキリスト教の精神で書いているんだ」と言ったことがあります。なるほど、銭形平次は悪人でも時には許して逃がしてしまつて、しくじり平次だと悪口を言われる。しかし悪い商人は徹底的にやっつける。チャンバラは絶対書かない。代りに銭を投げて、侍の腕に当たって刀をぱたり落とすと、八五郎が来て縛りあげる。

胡堂は、「宝は天に積める」というモットーで生きました。遺産は全て野村学芸財団に預け、返さなくてもいい奨学金を作っ

白聖活躍人 INTERVIEW

今年2月5日、白聖の大先輩で彫刻家の舟越保武さんが逝去されました。今回は舟越さんを師と慕い彫刻家になった伊藤馨一さん（S52卒）を紹介します。

●舟越保武先生との出会い

伊藤さんは小さいときから芸術家志望だったのですか。
伊藤 絵も好きでしたが、それ以上にスポーツが好きで、中学

まではサッカー、高校ではラグビーとアイスホッケーをやっていました。そんなとき、県民会館で舟越先生の大きな個展があり、魅かれるものがあつて4、5回通いました。さらに母校に講演にきてくれるというので、先生に紹介していただきお会いして「美大に行きたい」と言ったところ、「それなら是非東京に出て来なさい。上京したらば

「石を穿つ水のように辛抱強くあれ」という
恩師・舟越保武先生の教えを大切に、
心を和ませるような作品を創っていききたい。

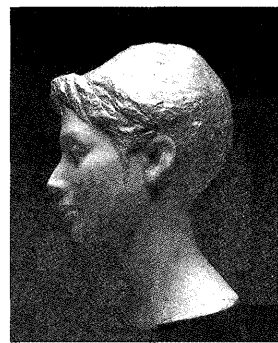
伊藤馨一さん（S52卒・彫刻家）



心に残る歌や詩があるように、人々の心を和ませ、ほっとさせるような絵や彫刻があります。私はそんな作品を創り続けて行けたらと思っています。

昭和52年卒。花巻生まれ。4歳からは盛岡で育つ。高校時代、講演で母校を訪れた舟越保武氏と出会い彫刻家の道に。新進気鋭の彫刻家として、現在、飯能市の旧家をアトリエにして活躍中。写真は彫刻がブロンズと小松石、台は堅いイタリア産松を使った異素材作品「PASSIO（パッシオ）」。

くのところに来なさい。きみは体力がありそうだから彫刻をやりなさい」ということで、上京して芸大を目指すことになりました。



胸像「月のまなざし」

した。結局、芸大は4回失敗して入れなかったのですが、その間、世田谷の桜に住んでいた舟越先生のお宅に通って直接デッサンをみてもらうことができました。今考えてみると、芸大受験に失敗したのは舟越先生のデッサンの指導と予備校の受験用のそれとがまったく違っていたということなんです。当時は芸大の主任教授だった舟越先生の指導方法で受験が通らないとは考えてもいませんでした。結局、作家としての指導と受験用デッサンはまったく別物ということだ

伊藤馨一彫刻展のご案内

伊藤馨一さんの彫刻展が下記の通り開催されます。ぜひお誘い合わせの上、お出かけ下さい。

日時：2002.12.10 [火] - 23 [月]

午前10:00 - 午後7:30

(最終日は午後4:30閉場)

場所：日本橋三越本店 6 階

アーツスクエア

●問い合わせ先

0429-77-2170 伊藤馨一



亡き子「月の」
舟越保武氏の作品
船越保武氏の子供の像

親切にしてくださいました。反面、作品に関してはとても頑固な方でした。先生がよくおっしゃっていたことは「石を穿つ水のように辛抱強くあれ」ということです。彫刻は一つの作品を仕上げるのにとても長い時間がかかります。しかし、ちいさな滴もやがて石に穴を開けるほど

だったので、考えてみれば舟越先生に4年間師事し、内弟子のように一対一のマンツーマンで指導を受けることができたわけですから、すごいことでした。大学は先生の紹介で、東京造形大学の佐藤忠良先生に師事することになりました。

●石を穿つ水のようになれ

舟越先生はふだんはどのような方でしたか。

伊藤 父親のようにやさしい人でした。時には一緒に食事やお酒をいただいたり、イタリアの彫刻の画集などを分けていただいたこともあり。私の小学6年生になる長男の「教馬」は、幼くして亡くなられた先生のお子さまの「二馬」からいただいた名前で、公私ともにたいへん

の力になる。好きなことは辛抱して続けていけば必ず見ていてくれる人がいるということ。この言葉に励まされ、彫刻を続けていくことができました。

●ほっとさせる作品を形に

異素材を組み合わせた独自の作風が評価されていますが。

伊藤 私は今、ブロンズと石、ブロンズと木といった異素材を組み合わせた作品に挑戦していますが、要は生の石、磨き上げたりしない生の素材感を大切にしたいと思っています。私の祖父の家が宮沢賢治の弟の精六さんと友人だったことから、子供のころ祖父の自転車に乗ってイギリス海岸へ散歩に行き、うちわ餅を食べながら祖父が語ってくれた賢治の話の聞くのが日課でした。賢治の童話のように、人の気持ちを和ませ、ほっとさせるようなものを形にしていきたいと思っています。

編集後記

福井大学の村野井均さん（S47卒）が『子どもの発達とテレビ』（かもがわ出版¥1400）を出版しました。著者は村野井徹夫（S35卒茨城大学教授 先輩の徒弟。出版社は京都です。ぜひ一読を。今号は内容盛りだくさんで、HP掲示板からは右記だけです。次号もご期待下さい。

〈お願い〉

平成14年度の会費未納の方は、同封の振替用紙で会費「1,000円」のお振り込みをお願いいたします。